



ギリシアRGCCがん遺伝子検査ラボ ニュースレター 【分裂速度から全生存率を予測する際のCTCの役割】

Breast Cancer Res. 2016

Mitosis in circulating tumor cells stratifies highly aggressive breast carcinomas.(循環腫瘍細胞の有糸分裂によって、悪性度の非常に高い乳癌を分類する。)

Adams DL, Adams DK, Stefansson S, Haudenschild C, Martin SS, Charpentier M, Chumsri S, Cristofanilli M, Tang CM, Alpaugh RK.

論文要旨

背景:

乳癌患者の末梢血から分離された循環腫瘍細胞(CTCs)の数を列挙することは、臨床と関連する低侵襲の診断検査として有望である。しかしながら、一般的な数の数え挙げを超えて患者を層別分類することが不可能であったために、CTCの利用は、生存の予測指標に限られて使用されてきた。比較すると、組織生検は、悪性度を確認し、悪性細胞のグレーディングを行う表土的な手法であり続け、癌の識別を可能にし、予後と予測値の患者コホートを評価できた。通常CTCの識別は、免疫蛍光染色での染色の有無に依存しているが、この評価は何か主観的で、これらの細胞を分類する能力は限られている。それに対して、組織学的な細胞学で用いられる具体的な方法は、癌細胞を識別し、あらかじめ特徴付けるのに使用されるゴールドスタンダードな手法になっている。ここでは、生存と関係したCTCsの予測値を改善するために、免疫蛍光染色で染色された標識されたCTCsに、細胞学的なサブタイピングを重ね合わせた。

手法:

この単純盲検前向きパイロット研究では、単純なCTCの数の列挙と、有糸分裂をしているCTCsのサブタイピングとの間の全生存率を比較するために、24ヶ月以上にわたって、晩期ステージの乳癌患者36名を追跡調査した。検出力分析($1-\beta=0.9$ 、 $\alpha=0.05$)によって、30名の患者によるパイロットサイズが、この患者のコホートを階層化するのに十分であることが求められた。但し、実際には36名によって階層化は行われた。

結果:

我々の研究結果では、CTC数は、患者生存の予後因子であり、危険率は5.2、 $p=0.005$ (95%信頼区間1.6-16.5)である。しかしながら、CTCsの有糸分裂によって同じ集団を単純にサブタイピングすると、危険率は劇的に上昇して11.1、 $p<0.001$ (95%信頼区間3.1-39.7)になった。

結論:

我々のデータからは、(1)悪性度の高い晩期ステージの乳癌では、有糸分裂中のCTCsは比較的良好に見られた、(2)有糸分裂中のCTCsの存在は、全生存期間の短縮と有意に関連していた、(3)この初期パイロット研究によって、より大規模でより詳細な患者コホート研究が明らかに必要である事が示唆される。

各位

R.G.C.C. 社ニュースレターのアブストラクトの訳を配信致しました。
原文をご希望の際はお申し付けください。

会員向けの無料配信がございます。

<https://www.rgcc-group.com/index.php?page=newsletter>

にてお名前とEmailアドレスを入力の上、ぜひご登録をお願い致します。

ここに登録頂きますと、以下の情報が配信されます。

- ・ R.G.C.C.社ラボとコンタクトを持つ世界中の医師からの質問とそれへの返答内容。
- ・ 世界中のがんの専門医から寄せられる論文、治療の手法、意見、アイデア、CTCにかかわる世界の学会情報などの共有。
- ・ R.G.C.C.社ラボにおけるCTC、CSC、天然成分由来の抗がん治療製剤開発などにかかわる最新情報の配信。
- ・ CTC、CSCに基づき治療された患者群のフォローアップ統計の推進(これは再検査の際に提出される患者フォローアップシートへの記入がもととなりますので、ぜひご協力のほどお願い申し上げます)。

以上ですがぜひ、このサークルを広め役に立つ情報の共有を推進したくご検討のほどよろしくお願い申し上げます。

株式会社デトックス